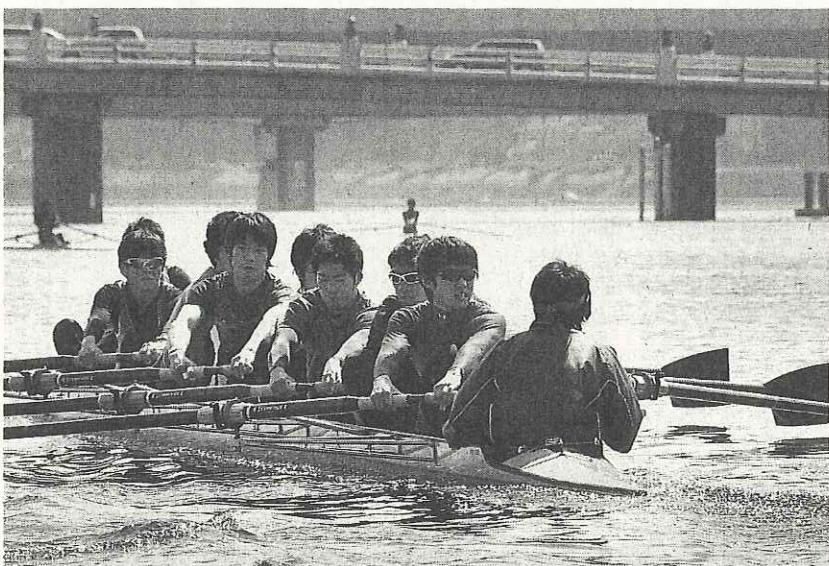


明治末の1906年の創部以来100年以上、関西のボート競技の強豪として君臨する京都大は、初心者を4年間で一流選手に育てるノウハウを持つ。全国的に競技人口が減る中、厚い選手層でチーム力を維持し、日本代表の候補選手が輩出。きめ細かい指導に加え、より多くの試合経験を積ませる方針で成果を出し、今年は花形種目のエイト（8人乗り）で悲願の全日本大学選手権制覇を目指す。

今月上旬、琵琶湖の南方の大津市の瀬田川で、何をともうのボートが水面を滑るように進んでいた。風は冷たく、周囲の山々もうつすら雪化粧する中、午前8時まで2時間にわたる練習を終えた唐鎌帝王将（21）は、「一度の練習で20～24キロをこぐのが目標。寒さは意外に簡単と慣れるもの」と白い歯を見せた。

早朝の練習に備えて部員の多くは瀬田川沿いに建つ宿舎所に泊まり込む。起床は午前5時で、オールをこぐのは原則として朝夕の約2時間。雨や雪が降っても水温が4度以上を保ち、視界が悪くない限り練習に休みはない。水中へ転落すると危険なため、モーターボートから監視するなど

京大ボート部 一流選手続々



志原の日本一を目指して練習する京大オート部のエイト

日本ボート協会によると、ボート競技の登録選手数は1992年度の1万4455人をピークに減り続け、2010年度には8716人と約4割減少した。大学に所属する選手数も93年度の4537人から、10年度は2665人に減っている。

少子化のほか機材の維持・保管にかかるコストなど、競技人口減少の理由は様々あるが、同協会では「テニスなどと比べると競技の敷居が高いのが実情」と分析する。

そんな中、京大は新人勧誘に力を入れる。00年秋に残った新人部員が5人だったことが響き成績が落ち込んだことだ。

競技人口は減少傾向

機材維持など負担重く

とを反省。02年以降は毎年20人以上の新戦力を確保し続けている。「選手層が厚ければ部内競争が活性化し、チーク力底上げにつながる」と島田監督。創部100周年を迎えた06年には、全日本選手権の男子舵手（だしゅ）付きペアで初優勝を飾る成果をあげた。

「学問にもスポーツにも手を抜かず努力するのが京大ボート部のモットー。その流儀は今も受け継がれている」と元OB会副会長の市原厚・関西ボート連盟顧問（75）は話す。OB会は毎年1500万円近い運営費をサポートしていることも、チーム力維持の大きくな力となっている。

とを反省。02年以降は毎年20人以上の新戦力を確保し続けている。「選手層が厚ければ部内競争が活性化し、チーク力底上げにつながる」と島田監督。創部100周年を迎えた06年には、全日本選手権の男子舵手（だしゅ）付きペアで初優勝を飾る成果をあげた。

「学問にもスポーツにも手を抜かず努力するのが京大ボート部のモットー。その流儀は今も受け継がれている」と元OB会副会長の市原厚・関西ボート連盟顧問（75）は話す。OB会は毎年1500万円近い運営費をサポートしていることも、チーム力維持の大きくな力となっている。

4年間でトップクラスに育つ理由が面白い。「ボート競技は同じ動作を繰り返す有酸素運動。毎日の練習の積み重ねが全て」と島田隆監督(47)。卓越した運動神経より單調な練習を繰り返す忍耐力こそ重要といい、同監督は「我慢強さは、厳しい受験競争を経て入学してきた京大生の強み

少人数
術面だけ
やアルバ
生活全般
に、ボー
め、チー
もなつて

云に積
ムワードでなく
イットの
相談の相談
ト部へ
いる。

確立し、勉強の仕方などにも乗

た。技の悩みなど大学の場で高めるだけ

準決勝でいつうどんと同様だ。大

阪・運動
勝で敗退
るだけに
しくらい
いう意味
将。目撃
手権初制
て全日本

返し5位に終わつ
に、「練習も試合
い集中力を高めよ
味を込めた」と唐
標はエイトでの大
制覇と総合優勝、
本選手権での優勝

少人数指導、実戦を重視

安全面にも気を配る。
单调な練習の日々
大学院生やコーチ陣を含め
れば約140人という大所
帯。選手だけでも80人近くに
上る。そのほとんどが競技未
経験者だが、京大は顕著な戦
績をあげてきた。関西選手権
では2010年度こそタイト
ルを逃したものの、09年度は
艇のかじを取る舵手(だしゆ)
付きフォア(4人乗り)など
2種目で優勝し、08年度には
エイトを制覇した。

京大ならばの育成アイデアも奮っている。操縦技術を伝えるため、1～4年生までを10人程度にグループ分けし、「縦割り班」を09年から設立。この年は、OB会からの寄付金で何とか学生の負担を軽減している状況だ。

今年のチームスローガンは「常に戦場」。関西で何度も

初心者集団 忍耐のオール

と笑う。高校時代に野球部だった唐鎌主将も今や23歳以下の日本代表候補の一人だ。「ボクは努力が結果に結びつきやすいスポーツ。毎日、充実感を感じて眠ることができ選手を送り込むなど、「積極的に全国大会に出場し、学生の経験値を高めることに気を配っている」と島田監督。悩みの種は艇の運搬や交通、宿泊費など部員1人当たり年間約40万円もの活動費がかかって